

アジア共通現代史教科書編纂委員会著・奥田孝晴監修

『東アジア共同体への道』

—学生市民が紡ぎ出す東アジアの近現代史—

(2010年、文教大学出版事業部)

評者：青木 利夫*

この本は2005年4月に生まれた。

中国・韓国で「反日運動」が起こったときである。日中・日韓の間には、まだ超えられぬ深い溝がある——それに気付いた人々が、これを解くために歴史を学び直し、書き直そうと考えた。「アジア共通歴史教科書編纂研究会」が文教大学に誕生し、在學生はもちろん、中韓の留學生や市民ら述べ600人が4年間に28回集まって議論し、立派な本ができた。この決意と努力を、ほくはとても尊いと思う。とくに呼びかけ人として、研究・論争・記述のすべてを引っばった奥田孝晴教授なしには、この企画はありえなかっただろう。

この労作を読みながら、ほくは1992年に発行された『欧州共通教科書＝ヨーロッパの歴史』を想い出した。仏・独・英・伊・スペイン・オランダ・ベルギー・デンマーク・ポルトガル・アイルランド・ギリシャ・チェコの計12カ国の歴史家が集まり、1章ずつを自国語で書き、パリ第3大学などが英仏語に翻訳、他の11氏が検討、修正して、これも4年がかりで完成した。EU委員会とフランス文化省の援助も得て、すでに10カ国で教科書に使われている。日本版を読んで、ほくは1997年に『湘南フォーラム』第2号に紹介した。

この両者を比較してみると、後輩格の『アジア共通版』の特色や課題も浮かびあがる。すでに書いたように、『アジア』は若いアマチュアた

ちが勉強中の衆知を集めた感じなのに対して、『欧州』は高名な大学教授たちの寄稿だ。だが、こちらも討議や修正を経ており、こなれていてむしろ読み易い。

もっと大きな違いは、『アジア』が共通『現代史』と名乗っているように、範囲がアヘン戦争(1840年)以後の、日本を中心とした政治史なのに対して、『欧州』は序章が「ヨーロッパとは何か」、第1章が「ツンドラから神殿へ」と文化的な色彩が強く、挿絵や地図などが豊富で、まことに美しい。

「それでは比較にならぬ」と思われるだろうか。そうではない。紀元前にさかのぼり、宗教や言語、民族移動から説き起こされると、ヨーロッパという地域の深い共通地盤に突き当たる。編者のF・ドルーシュ氏は「ヨーロッパは1つなどと宣伝する気は全くない」という。氏はフランス人を父に、ノルウェー人を母とし、英国で生まれ育った。かれ自身、ヨーロッパ共通教科書といってもいい。

『アジア』は釈迦や孔子を語る物理的余裕がなく、文化史から説き起こすのを後日に俟つのは理解できる。しかし、そうした根底に触れるのは単なる閑文字と思ったら、共通教科書はずいぶん浅く淋しいものになるだろう。

むしろ『アジア』側の魅力は、さきに述べたように、すべてはこれからという若さにある。この本がどのように作られたか、という経緯や

* 文教大学名誉教授

試行錯誤、参加者たちの微笑ましい発見などが巻末にたっぷり紹介されている。これこそ教科書の名にふさわしく教育的なのだ。

恐らく生まれて初めて、複雑な討議に加わり、発言を求められながら、本をつくる難しさや楽しさを味わったひともあるだろう。少し意識の高い参加者は「歴史とは何か」という哲学的な問いに直面したかもしれない。

「中国への親近感は、反日デモで裏切られた気持ちでした。しかし、それが何故かこの会で触れ、一方的な感情だったと反省しています」「私たちは何かしらの影響を受け、個々の考えを形成しています。歴史はそういう私的な部分を排除し、事実に基づいて書かねばならない。でも事実という部分がまた難しく、その事実も何らかの影響を受けた事実かもしれません。執筆に携わって多くを学び、貴重な経験ができたと思います」。

『ヨーロッパ』側も、スペインの「大発見」やヒトラー独裁などの汚点と正面から取組み、物欲や食糧難などの背景を指摘する一方、ナチスを防げなかった民主勢力の欠陥を強調する。歴史を書く難しさを改めて思わされた。

注—「東アジア共同体への道」

アジア共通現代史教科書編纂委員会編
監修： 奥田孝晴（文教大学国際学部教授）
発行： 文教大学出版事業部、3700円
初版： 2010年7月20日

「欧州共通教科書——ヨーロッパの歴史」
F. ドルーシュ総合編集・花上克己訳
発行： 東京書籍、6800円
初版： 1996年。